100年先を読む ㉘

既存秩序の激変を企業躍進の好機とせよ

急激な変化が予測される疫病以後

疫病の地球規模の蔓延（まんえん）であるパンデミックは人類の歴史に何度も登場するが、史上有数の被害になったのは14世紀中ごろに中央アジアからヨーロッパに伝染し、15世紀前半まで蔓延したペストである。正確な数字はないが、当時のヨーロッパの人口の30％から60％に相当する3000万人から5000万人が死亡したと推定されている。これだけの規模の被害が発生すれば、個人や都市の悲劇だけではなく、経済や文化という領域にまで変化が波及していく。

領主が農民を支配して維持していた荘園制度という経済構造は人口の激減により維持できなくなり、反乱によって農民が自作する農業経済が登場してきた。キリスト教会は疫病の恐怖から人民を救済するどころか、当時はフランスのアヴィニョンにあった本山から教皇クレメンス６世が逃亡したことにより、カソリック教会が維持していた虚構の権威が崩壊した結果、ヨーロッパ各地で宗教改革が勃発（ぼっぱつ）し、ルネサンス時代へと展開していった。

今回のパンデミックも同様の変革を発生させることは十分に予測できる。

経済分野では世界規模で構築されたサプライチェーンが破綻（はたん）して世界の産業構造の見直しが必要となり、政治分野ではアメリカとの二極体制をめざした中国の一帯一路戦略も実現困難になってきた。レーニンが喝破したように「何十年間で何事の変化もないこともあるが、数か月間で数十年分の変化が発生することもある」という時代に突入しつつある。予測される変化を中小企業の視点から検討したい。

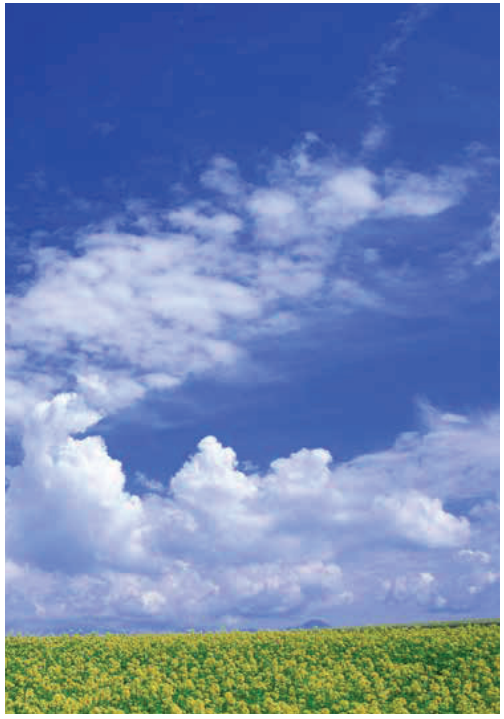
情緒・多様・共感がキーワード

３密の回避が推奨され、あらゆるビジネスに情報技術が一気に導入された。

この急速な変化は騒動が終焉（しゅうえん）しても逆行はしないが、ビデオ会議という乾燥した情報交換では充足されない情緒という人間同士の接触の価値が見直されている。情緒の特徴は多数に共有されるほど価値が向上することであり、その価値を経営や商品に付加することが現在以上に要求される。販売できなくなった作物や商品を無償や安価で配布する活動は、企業の情緒価値を向上させるものである。

日本でもアメリカでも中央政府の対策の出遅れが顕著であった反面、有能な首長が牽引する地方政府の活躍が注目されるようになった。何度も機運があったものの実現しなかった地方分権への胎動が拡大していく。画一から多様への転換である。これまで広域に、全国に、場合によっては世界に拡大していくことを目標とする企業が大半であったが、多様な価値が評価される時代になると、地域に根差した歴史や伝統を反映した企業活動が発展の基礎となる。

今回の騒動で、これまで意識されなかった国境や県境が突然、役割を発揮することとなった。その結果、世界規模、全国規模で構築されるサプライチェーンの脆弱（ぜいじゃく）な側面が顕著になった。より安価という基準だけで構築された産業構造が破綻した瞬間である。その一方、地域では休業を余儀なくされた企業が地域への貢献を模索し、地域内部での相互扶助が活発になってきた。利益が基準のゲゼルシャフトから共感が基準のゲマインシャフトへの転換である。



期待される変化できる中小企業

世界は連続していない。長期の時間では、地球の生物は最低でも過去４回は発生した全球凍結（スノーボールアース）といわれる極端な寒冷時期に直面し、それ以前の生物の大半が絶滅する一方、主流ではなかった少数の生物が繁殖して新規の生命環境を登場させた。短期の時間では、自然の災害や人為の闘争などにより、社会環境も激変を経験している。その一例が冒頭に紹介したパンデミックを原因とした中世からルネサンスを経由した近世への転換である。

今回のパンデミックも過去の何度かの転換に匹敵する変化をもたらすことは、すでに多数の識者が指摘している。生物学者Ｃ・ダーウィンは「もっとも強力な生物が残存するのではなく、もっとも賢明な生物が残存するのでもない。唯一残存できるのは環境に対応し変化できる生物である」と喝破している。

既存の政治秩序や経済秩序が激変する時代に、中小企業がもっとも変化に対応できる存在として、パンデミック以後の社会を再建する重要な勢力となることを期待したい。

東京大学名誉教授
月尾嘉男（つきおよしお）
Tsukio Yoshio

昭和17（1942）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本』（東京大学出版会）ほか多数。